



吉田 亜美さん(権現堂)

取材者：(特活)くびき野NPOサポートセンター 新保
取材日：1月17日

言葉の力で誰かの助けになりたい

現在、新潟県柏崎市内で家族と一緒に生活を送っている亜美さん。4月から、福島県内の高校に進学する予定です。今回は、柏崎市内の「共に育ち合い(愛)サロン むげん」で日々の生活や「わたしの主張 柏刈地区大会」に登壇した際のお話を伺いました。



▲お姉さんの桃子さんと一緒に
(左：桃子さん、右：亜美さん)

■震災発生から柏崎市内での生活

震災が発生したのは、小学5年の3月でした。まず実家に集まったのですが、避難が必要な状況になり、母と姉と一緒に新潟県柏崎市に避難してきました。柏崎市での生活で一番驚いたのは、雪です。浪江町では雪が降らなかつたので、こちらの冬は今でも慣れません。また、隣の長岡市の大花火大会へ行ったのがとても印象に残っています。今日取材を受けている「共に育ち合い(愛)サロン むげん」さんは、こちらで復興支援員を

している姉を通じて出会いました。学校生活がうまくいかなかった時など、ここで過ごしていたこともあり、いつもパワーをもらっています。4月からは、福島県内の高校へ進学することになりました。また家族が離れ離れになってしまいましたが、福島へ戻りたいという気持ちがあるので頑張りたいです。

■母への感謝と言葉の力を伝えたい

昨年、「わたしの主張 柏刈地区大会」に登壇し、奨励賞をいただきました。テーマは、「強い思いは言葉とともに」。友人とのすれ違いから学校を休みがちになった時期に私の背中を押してくれた母への感謝と、「言葉の力」についてスピーチしました。当時学校を休みがちになってしまった私に、母は『嫌なこと、怖いことを恐れ、逃げていく自分がいるよ。そんな自分をみつめ、受け止めなさい』と言いました。私は心の中で『何も知らないくせに。わからないく

せに……。自分でもちゃんと考えている。頑張っているのに。これ以上踏み込まないで』と疑問に思いました。そんな私に向かって、『大丈夫。できるから』『亜美が思っていること、そのまま言葉にしていいんだよ。相手にちゃんと伝えて、前に進もう』と声をかけてくれた母。

この言葉をきっかけに、すれ違っていた友人に思いを伝えるため、泣きながら何度も言葉を口に出す練習をしました。少し時間はかかりましたが、自分の思いを友人に伝えることができ、母の一言に背中を押され一歩前進することができたと思っています。

母の言葉には、言葉の力強さを感じます。『ありがとう』という、たった一つの言葉にも、感謝や気遣いの気持ちが伝わっています。これからもたくさんの人との出会いがあり、また悩むことがあるかもしれませんが、自分なりの伝え方で、『思い』とともに言葉をつないでいきたいです。母の言葉に助けられたように、自分の言葉が誰かの助けになればと思います。

浪江のこころ通信

・第45号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第45号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





小泉 泰代さん(川添)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：1月30日

教室の仲間と和気あいあい、 楽しく、元気に暮らしています

青森県むつ市。下北駅から車で10分のところにある“工房むつ／河岸手芸店”。店主河岸よしさんの傍らにアシスタントのように教室に溶け込んでいる小泉さんの姿がありました。



▲工房むつ店内で、河岸よし先生と一緒に

むつ市に避難してきた頃、取れたボタンを付けようと針と糸を買いに、手芸店を探していて、寄らせてもらったのが「工房むつ／河岸手芸店」。その時はちょうどお教室の日で火曜か木曜のどちらかでした。みなさんがいるにもかかわらず「コーヒーでも飲んでいって」って先生が声をかけてくれたんです。都会ではあり得ない話。来たばかりで教室でみんないる中に入っていくのもあり得ないし、「いいです」って遠慮していたら「飲んでいって」って。私が

浪江町から震災後に来ていることを話したりしているうちに、終いには「明日も来てちょうだい。明日も来なさい」って言ってくれたんです。それから毎日いりびたっています。教室には幅広い年齢層の方々が集まっていて、みんなで函館に行ったり、食事をしたり、地元のお祭りに誘ってもらったり、地元料理のことを教えてもらったりしています。馴染の人が増えてくると、だんだん根っこがはえてきて、ここを去るときはきつとつらいだろうなと考えてしまいます。軽く渡っていきたくけれど、この歳になって友達もいないところに来て、それをみんなよくしてくれる。みんなが寄れるところ。この場所に救われました。昨年暮れに娘が結婚し、今年息子が大学を卒業して盛岡で就職します。私は夫と二人、仙台で借りているところを拠点にして、今のところはむつ市に通っているのだけれどいいです。この「浪江のこころ通信」を通して「○○さんが、○○にいますんだ」って、元気そうだなとかわかるので、みんな載ってもらいたいですね。浪江ならではの良さがあると思っています。



▲教室に通う89歳から40代までのみなさんと、去年の秋の食事会にて



▲お雛様がウィンドーでお出迎え



古場 泉さん・容史子さん(幾世橋)

取材者：浪江町復興支援員 田中・茨城NPOセンター・コモンズ 横田
取材日：1月18日

みなが集える場をつくり元気に過ごす

古場さんご夫婦は、原発災害により、息子さんのいるつくば市へご夫婦で避難しました。そして、あるきっかけから、つくば周辺に避難している方の集まる会を主宰するようになったそうです。



▲新年会のステージで演奏する古場さんご夫妻と息子さん

■手探りでつくった交流会
避難当初は、つくば市が主催する「避難者交流サロン」に参加していましたが「皆でもっとおしゃべりができる場所が欲しい」という声があがり、知人からもそういう場を作ってほしいとの要望がありましたので、なんとかしたいと考えていたとき、地元のスパーが行っていた「私の企画応援します」という募集記事を偶然見つけました。そこで浪江町出身の民謡歌手「原田直之さん」をお招きし

■今後に向けて
最初は、つくば市に避難された方を中心とした会でしたが、会の情報を聞きつけたつくば市民の皆さまや学生さん達、さらにはつくば市外へ避難された避難者の方も、新たにしゃべり場に来てくださるようになり、たくさんのご縁が繋がってきました。

ての交流会の企画を応募してみたところ、残念ながら企画は不採用でしたが、原田さんからは出演の了承も得ていたので、自力で開催することにしました。浪江町の協力を受けるために自治会を作ろうと「元氣つく場合（いい仲間つく浪江）」という会を立ち上げ、平成24年6月から活動を開始しました。原田さんの交流会は同年9月に実施でき200名参加と大盛況で、現在も毎月、茶話会を中心に、様々なゲストを招いて避難者同士や避難先の地元住民と交流できる活動を継続しています。安心して参加できる楽しい交流会にすることを心がけ、しゃべり場に加え、体操、音楽などいろいろな方の協力をいただきながら企画し、時にはバスツアーなども実施しています。



▲今年1月の交流会の様子

「少しでも明るい話題で語り合い、元気を分かち合える場を作ろう」という想いで、住み慣れた家を離れた人同士心の絆を深めつつ、避難生活のさらなる安定の一助になればと思っています。元氣つく場合（いい仲間つく浪江）を通じて、いろいろな人が出会えるよう、今後も仲間を増やしていきたいと思えます。多くの皆様のご参加をお待ちしておりますので、ぜひ、私たちの会にお立ち寄りください。